

# カナダ軍事史研究大会参加報告

立川京一

はじめに

平成十二年五月五日から九日にかけて、オタワ大学を会場として開催されたカナダ国防省主催「カナダ軍事史研究大会」(Canadian Military History Conference)に参加し、研究報告を行った。本大会には約二〇〇名が参加した。参加者の多くはカナダ軍各種学校戦史教官、現役・退役軍人、戦争博物館員、国立公文書館員、大学教員、高校教員、大学院生らであった。国外からは、筆者のほか、フランスから一名(国防省国防史研究センター員)、イギリスから四名(大学教員)が参加していた。

一 参加に至った経緯

昨年初頭、日本からの今次研究大会への参加・研究報告者を熱望する主催者側が在オタワ日本大使館に照会、外務省北米局、防衛庁防衛局を経て、防衛研究所に打診があり、カナダの歴史に関

する知識、過去の研究業績(カナダに関する研究論文)、並びに語学力(英語、フランス語)などの観点から、筆者が参加し、研究報告を行うこととなった。筆者の参加は主催者の招待であり、旅費、宿泊費、食費(限度額あり)等の必要経費はすべて主催者側が負担し、飛行機、及び宿舍の手配も主催者側が行うという荣誉に預かった。

二 研究報告

参加打診当初から、カナダの軍事史に主眼を置きつつ、日本とカナダに共通する戦史となれば第二次世界大戦の太平洋戦域における戦闘へのカナダの関与と日加両国の同戦争に関する記憶の問題をテーマに報告を実施すべく考えていたが、主催者側の要望で、同大戦中、日本陸軍が実施した風船爆弾攻撃をひとつの柱として報告を実施する運びとなった。

研究報告は大会第四日目午前のセッションで実施した。同セッションの司会はカナダ国防省歴史・遺産部長で今次研究会の運営組織代表でもあるセルジュ・G・ベルニエ氏が務めた。発表時間には質疑応答を入れて、三〇分ほどであった。(報告内容に関しては、紙幅の都合上、割愛する。)

カナダでは第二次世界大戦に関してはヨーロッパ戦域について語られることがほとんどで、今回の報告が太平洋戦域についてのものではなかったため目新しく、聴衆の興味を引いた。風船爆弾に対しても意外なほどに関心が高く、日本軍の作戦実施の意図について詳しく知りたいという参加者がいた。また、聴衆の中に、カナダ軍がアメリカ軍と合同で実施したキスカ島奪還作戦を研究している者があり、彼のコメントから、すでに日本軍が撤退してしまっていたために戦闘がなかったはずの同島で、日本軍が敷設したまま放置した地雷によってカナダ軍兵士四名が死亡しているという情報を得た。さらに、カナダには戦争中、太平洋側のブリティッシュ・コロンビア州沿岸部にある灯台を日本海軍の潜水艦が砲撃した事件が語り伝えられており、この件について日本側でも調査してほしいという要望が出た。

### 三 参加者による研究報告全般について

五日間にわたる大会期間中に実施された研究報告は一〇〇を数えた。軍事史研究大会が四〜五年に一度の頻度でしか開催されな

いという条件に鑑みても、研究報告数が一〇〇に達するということは、カナダにおいて軍事史研究がいかにさかんであるかということの証明であろう。また、今次大会の共通テーマが「一〇〇〇年から二〇〇〇年までのカナダと戦争」という極めて漠然としたものであったことも研究報告がこれほど多数になった要因と考えられる。

したがって、研究報告のテーマも実に多種多様、かつ、広範囲に及んでいたが、いずれも何らかの形でカナダに関係するものであった。具体的に述べれば、報告がテーマとして取り上げた軍事史上のトピックスは、ヨーロッパでの七年戦争やスペイン王位継承戦争が北米に波及して引き起こされた一連の英仏植民地戦争、アメリカ独立戦争と一八一二年の英米戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦、キューバ・ミサイル危機、湾岸戦争、コンボ紛争などである。一九九一年の湾岸戦争や一昨年のコンボ紛争といった最近の戦争をも研究対象として報告がなされている点は、我が国における軍事史研究に対する考え方と異なり、実学的な側面が顕著であることがうかがえる。

議論の中心となるテーマも、戦争指導、戦時・平時における指揮・統率、戦場での士気、戦略・戦術思想、海戦、空戦といったオーソドックスなものから、集団安全保障、NATO、アメリカやイギリスとの二国間同盟関係、核兵器に対する方針といった国防政策の根幹に関するマクロ的な視座から軍事史を説くもの、捕

虜、日系人強制収容、徴兵、海外派兵など非自発的体験や戦争の記憶の問題を扱ったもの、部隊史、指揮官の人物伝、地方史という側面から見た軍事史、兵器の開発・製造・配備・装備・供給、銃後の問題、戦争報道、スポーツなど軍隊内の娯楽、さらにはカナダに特徴的と言える軍隊における先住民、少数民族、イギリス系とフランス系との関係、そしてPKOなど実に多岐にわたっていた。こうしたさまざまな研究報告を極力、関連のあるものどうしを組み合わせて、三五のセッションが組まれた。

同時並行して複数のセッションが持たれるというプログラムであったため、すべての研究報告を聴講することは不可能であったが、出席したいいくつかのセッションにおける研究報告に共通することは、事実関係やデータなど資料の分析に基づいた緻密で、どちらかと言えば地味な研究報告がほとんどであった。反対に、議論を喚起するような報告は第一次世界大戦の英雄であるビリー・ビショップに対する評価を再検討したものや、第二次世界大戦時の日系移民強制収容、日本軍のカナダ人捕虜の扱い、徴兵制導入に反対していたフランス系住民を海外派兵させたことなど戦争の記憶に関する報告がいくつか聞くことができたのみであった。

#### 四 戦史現地研究

大会期間中、オプシヨン企画として、一九五九年から二年の歳月をかけてオタワ郊外に建設された行政府・軍中枢部用の核シェ

ルター「ディーフェンバンカー」と戦争博物館別館「ヴィミー・ハウス」を見学するツアーがあり、参加した。前者は地下要塞と呼ぶにふさわしく、厚いコンクリートの壁に包まれた五層からなる建造物である。核攻撃が予想される非常時にはここに連邦首相や閣僚、軍首脳が集まり、国を指導する計画であった。そのための指令室や情報収集・分析のための部屋もある。シェルター内には寝室、食堂などの生活空間はもとより、病院、ラジオ放送局などの施設もある。また、超大型の貯蔵庫もあり、冷戦期、そこにはカナダが備蓄していた金が格納されていた。以前、ベルダンの地下要塞やマジノ線要塞などを見学したことがあるが、「ディーフェンバンカー」はその現代版といった感じである。

後者は第二次世界大戦以降、戦争終了直後に払い下げられた各国の兵器類（戦車、装甲車、軍用自動車、大砲、対空砲、魚雷など）を展示している。特徴的であったのは、さすがにカナダだけあって、氷上走行車両が数台、展示されていたことであろう。

ちなみに、戦争博物館としては、オタワ市内にある本館の方が方針が明確で、展示も必要最小限に限定して整然となされており、見学しやすく、教育や広報の場として活用できるようになっている。展示は一階が植民地時代から第一次世界大戦まで、二階が第二次世界大戦、三階がNATOとPKOであった。現在、戦争博物館長はカナダ歴史学界の重鎮であるJ・L・グラナシュタインが務めている。

おわりに

今回、カナダ国防省主催「カナダ軍事史研究大会」に参加して、カナダ国防省歴史・遺産部員をはじめ、多数のカナダ人軍事史研究者と知己を得たことを今後の研究活動に生かしていきたい。防衛研究所戦史部のカウンターパートであるカナダ国防省歴史・遺産部では外国との研究交流を企画中で、日本もその対象国として考慮されていると聞く。日加間には第二次世界大戦だけでなく、日英同盟、シベリア共同出兵、アメリカとの戦争と同盟関係、PKOなど軍事史研究でテーマを共有できる問題が多く、かつ、いずれも重要な事例である。今後、軍事史の分野で、カナダとの研究交流を推進すべく、取り組むことができれば幸いである。